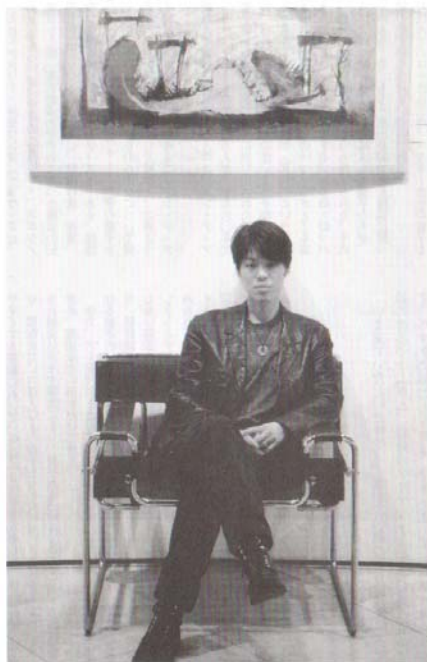


コリアン・ディアスポラ
アーティストは語る



国家・人種・文化——三つの壁と闘う
ミヒコ・ナタリー・ルモワンヌ

菊池恵介 訳

Mihée-Nathalie Lemoine (ミヒコ・ナタリー・ルモワンヌ)



ミヒコ・ナタリー・ルモワンヌは、フランス生まれの作家、映画監督、翻訳家。1965年生まれ。1988年に『The Korean Room』を発表。2001年に『The Korean Room』を映画化した。2004年に『The Korean Room』を映画化した。2004年に『The Korean Room』を映画化した。



"50-53" on rice paper, ソウル, 1995



"Women in the closet" on Korean paper, ソウル, 2001

以下に紹介するのは、ミヒコ・ナタリー・ルモワンヌの『ミヒコ・ナタリー・ルモワンヌの日記』が、今年の二月にディアポラ・アート研究所の協力で東京経済大学で公開された講演の記録である。ミヒコさんは現在韓国のソウル市を拠点に、映像作家、音楽家、作家としての多彩な創作活動を展開しているアーティストである。韓国の釜山生まれの彼女は、二歳のとき、あるベルギー人夫妻の養子となつて、ベルギーに送られた。そのため彼女は自らのルーツについて何も知らず、フランス語を母語として育った。このような彼女は、海外で暮らす朝鮮半島の出身者、いわゆるコリアン・ディアスポラの一員である。

いま世界には、在日朝鮮人を始め、約五三〇万人のコリアン・ディアスポラがいるといわれており、そのうちの約一〇〇万人が、一九八〇年代以来韓国政府による「帰国勧誘」の結果、海外に送り出された韓国出身の養子である。しかし、ベルギーで育った彼女の生い立ちが複雑である。これら養子たちが直面する「国家」「人種」「文化」という三つの壁は、容易に乗り越えられるものではない。その一つが最も高く、しばしば否定的に描かれるのを嫌い彼らに要求する。あるヨーロッパ在住の韓国出身養子は「自分たちは親からも国からも捨てられた。その刻印を負って生きている」と語っている。しかも成人した彼女たちが、アイデンティティの拠り所をもとめ、もう一度出身国である韓国に戻ってこようとする。そこには別の壁が待ち受けているのである。

ミヒコさんが韓国に移住したのは一九九三年。ベルギー在住の養子たちのグループのための、韓国における活動拠点を立ちあげることが当初の目的だった。しかし、一年また一年と滞在を重ねていくうちに、たちまち十年の歳月が流れ去ってしまった。この間、彼女は養子の権利運動と自身の創作活動とのあいだに多忙な日々を送ってきた。韓国の韓国養子縁組政策を見直し、養子たちが自身で自分の出生に関わる記録にアクセスし



図1 ショート・フィルム「養子」ブリュッセル, 1988

から生まれたこと、そして、自分も韓国人の母から生まれたこと、また父親不明の出自をもつことは、どうすることもできない事実でした。しかし大人になつたいま、これらを引き受けられるかは、私の自由

ら願の平たさを馬鹿にされてきたからです。ほかに、ロックの曲を挿入していますが、いずれもアジアを歌っている曲です。どれもエントラリスムとレイシズムの入り混じった曲ばかりですが、これもわざと使っています。ナレーションでは「お見ぬ母への手紙」を朗読しています。私の実の母は想像の人でしかない。その空想感を淡々と語りこめました。「ヨーロッパ人のなかにいると自分をコリアンだと感じる、しかしコリアンにまじっていると自分をヨーロッパ人と感じる。こうした当時の私の憤りな表現しています。

自分も韓国人の母から生まれたこと、また父親不明の出自をもつことは、どうすることもできない事実でした。しかし大人になつたいま、これらを引き受けられるかは、私の自由

自分も韓国人の母から生まれたこと、また父親不明の出自をもつことは、どうすることもできない事実でした。しかし大人になつたいま、これらを引き受けられるかは、私の自由

自分も韓国人の母から生まれたこと、また父親不明の出自をもつことは、どうすることもできない事実でした。しかし大人になつたいま、これらを引き受けられるかは、私の自由

自分も韓国人の母から生まれたこと、また父親不明の出自をもつことは、どうすることもできない事実でした。しかし大人になつたいま、これらを引き受けられるかは、私の自由

自分も韓国人の母から生まれたこと、また父親不明の出自をもつことは、どうすることもできない事実でした。しかし大人になつたいま、これらを引き受けられるかは、私の自由

自分も韓国人の母から生まれたこと、また父親不明の出自をもつことは、どうすることもできない事実でした。しかし大人になつたいま、これらを引き受けられるかは、私の自由

か、ベルギーの養子でした。しかしベルギーの子は希少なため、競争率が極めて高く、また養父母はインドの子は嫌がりました。私が居るというのがある理由です。そこで白羽の矢が当たったのが当時人気が上昇中の韓国養子でした。またベトナムからのポトビ・ブルという選択もありましたが、ここには戦争の影響があるため、養父母は嫌がりました。韓国の養子は他に比べて安上がりであること、養子縁組の希望を出してから六ヶ月以内にもうけることが殆どだったからです。

国家・文化——三つの壁

私たち韓国養子は、おのずとインター・ナショナル (International)、インター・レイシナル (Inter-racial)、そしてインター・カルチュラル (Inter-cultural) という三つの規定性を重層的に負うことになります。これは養子一般にあてはまることではなく、とくに白人世界に引き取られていく韓国養子たちには負わされる宿命です。韓国養子は世界に二〇万人いるわけですが、これだけの数の人間が、肌の色の違いなどで思い悩むこととなります。もちろん国際養子といっても、ひとりひとりの体験はみな違います。今日お話しするのはあくまで私個人の例にすぎません。

ベルギーの養父母の家庭には、私のほかに、うちに二人の韓国養子が加わりました。三人ともみな「捨て子」という扱いで

父母との心の溝を埋めることはありませんでした。

ある日、妹に「あなたは中国人だけど、私は白人よ」と言われました。たしかに鏡に映る私の顔は、切れ長の目をしたアジア人の顔です。しかし妹も私に劣らず、アジア人の顔をしているので、まったく奇妙な言い方です。このころから私たちの間で、まったく奇妙な言い方になりました。私自身、トラウマになるほどのつらい経験をしたことはありません。しかし、当時の韓国養子ブームによって私たちが受け入れた養親は、国際養子にどのようなインター・レイシナルな問題に対して、あまりにも鈍感で、不向きでした。こうして私たちは、肌の色の違いやアイデンティティについて孤独に思い悩むことになりました。

アイデンティティに悩む

子どもにとって、通常、家族とは自分外的世界が守ってくれた存在であり、心の拠り所なのではないかと思えます。たとえ家の外でいじめられても、家族だけは自分をありのままに受け止めて、保護し、わかってくれる。ところが、私はそのような安んずる場所を一度として養父母の母で感じたことはありません。とりわけ、国際養子のインター・レイシナルな性格からくる疎外に対する理解は得られませんでした。彼らとしては、私たちが出自のことなど早く忘れて、一〇〇パーセントのベル

ギーの「孤児」を引き取ることで、養親たちは慈善行為をしているという意識を持っていた。さきほど述べたように、私が養子に出されたとき、書類には「五歳」と記載されていたが、本当は一歳でした。私の妹と弟は登記されていたおり五歳だったので、彼らは母国の記憶がありました。そこが何も覚えていない私と大きな違いです。日本の子が欲しかったベルギーの養父母は「私たちがいつも『日本人らしく』学校でよい成績を修めてくるよう期待しました。でも私たちは『日本人』ではありませんが、アジア人の移民はめずらしく、学校でニクラスメートに浴びたものの、地域社会ではねに好まれるまでではありませんでした。

一九七〇年代の初頭、弟に日本人の友達ができ、すると、その子の母親が私の養父母を訪ねてきて、こう言いました。「お宅の朝鮮人の子をうちの子と遊ばせたいの困ります」と。私はコリアンが、日本人に差別されているらしいことを思い知らされた最初の出来事です。ヨーロッパで黒人差別やアジア人に対する差別意識があることはもちろん知っていましたが、しかし同じアジア人同士でも差別があるとは思っていませんでした。私は、目の細さを理由に学校などでよくからかわれるのですが、養父母はそんな悩みを理解するどころか、同じ偏見を世間と共有していました。ですから、養

子にならなければいいのと思っているわけですが、とうとう無理な相談でした。

また養父母からは、けんかしたるたびに、思着せがましいことを言われました。「あんたたちが生まれ生きているのは、私たちののおかげよ。でも私たちが拾ってあげなかったら、あなたちはあの韓国といふ穴倉でずっと死んでいたでしょう」と。すると、売り言葉に買い言葉で、つぎのよう言い返して、「子とてがでできないあなたたちが、家族になれたのも、私たちの存在のおかげよ。だから貸し借りはないはずでしょ」と。好きで養子になったわけでもないのに、そのことを思着せがましくいわれることに、我慢がなくなりました。

こうして自尊心を深く傷つけられ、ある日、養父母の家を去りました。書類上は一六歳、しかし実際には一三歳のときのことです。この年で自立するのは、本当に大変でした。ベルギーには頼れる親戚などいませんでしたから、本家に「異邦人」の生活でた。周囲のベルギー人と共有していたのは「ナタリー・ルモンヌ」という名前だけ。家を出てからの最初の二週間間は、精神病のおおきなところに寄宿させてもらい、アルバイトをしながら、学校に通いました。人にとりなれた顔を貼られようとも、かっとなって言い返すのではなく、相手を見せそな偏見にとらわれているのかをじつと見極めること。それが当時の私の信条であり、苦境をのりきる力でした。

で、関係者の一人から私の出身国について短編を撮ってみたいかと提案されました。ちょうど夏季の映画制作研修を受けたばかりだったので、二つ返事で引き受け、シナリオを書きました。すると、ディレクターのOKが下り、機材と制作スタッフを提供してもらえ、このように。ただし、制作日数は正味二日、非常に限られた条件でした。この映画の製作中、どうしてもエキゾチックな作風にならないのかとか、もっと情感たっぷりに描かなくては、さまままな注文をつけられませんでした。しかし、私は単に国際養子の問題を扱ったわけではなく、むしろ、ベルギー人をはじめ、西洋人ももっているアジア人についてのステレオタイプ (固定観念) や偏見を主題にしたかったのです。この作品は映画祭で上映され、幸運にも部門の最優秀賞を受賞しました。するとさつぱりベルギーの韓国大使館から連絡が入り、招待されることになりました。これまで何度韓国大使館には足を運んだのですが、韓国籍をもたないため、建物にも入れてもらっていませんでした。しかし賞をもらうやいなや、手のひらを返したような対応です。

こうして私も、当時開始しようとしていた「母国訪問ツアー」に組み入れられることになりました。「母国訪問ツアー」とは、世界中の韓国養子たちに母国を見学させ、国家に役立つ有用な人材としてふたたび「つなげよう」とする政府プロジェクトです。このようにいふと、一九八九年に初めて韓国を訪ねることにしました。二四人のツアー参加者のうち、四人が米国籍、残りはヨーロッパ諸国の国籍でした。ちなみに韓国養子は、米国に二万人、ヨーロッパに五万人、そしてオーストラリアに一万八千人います。ツアー中、スウェーデンからの参加者の一人から、一九八六年に韓国養子たちのデモがおこなわれたことを教わりました。韓国養子たちが「自分たちを『韓国の人』として認めるよう求めて、韓国大使館前で抗議行動を起こしたのです。当惑した大使館は、彼らの館内入場を初めて認め、懐柔策として成人養子たちの会合を奨励しました。

ベルギーの韓国大使館では、副大使殿に「ふん」さうされました。「いったいなんですか、あの重んじ韓国像は？」大韓民国は五千年の長い歴史を誇る由緒正しい文明国です。あなたの韓国像はちゃんやらかしい！ 祖国がどんなにすばらしいところか、あなたにはぜひ見て来てもらう必要がある！」

ど、おそ想像できないようでした。この店長は、さんざん馬鹿にされましたが、自分の民族性を考えさせられた点で、重要な出会いでした。それまでの私は、ベルギー人として受け入れてもらうため、必死に同化しようとしていたのですが、彼にしてみれば、私のやってきたことすべてが、何の価値もない無駄な努力だったのです。もちろん、これはは重層的に賛同するわけにはいきません。しかし、自分とは何者かを問い直していくきっかけになりました。店長とはよく閉居後に食事をする人がら議論をしました。彼は酔うとひどく泣き戸になる人で、自分がフランス語で不自由していることを根に持つ、「そんなにベルギー人であるおまえが、何で日本料理なんかに働きたいんだ」とよく嫌味を言われました。新しい喧嘩もしたのですが、いま思えば貴重な時間でした。こんな風に「焼肉HBOO」でときを過ごすことが私の運命の年となる一九八八年がやってきました。ソウル・オリンピックの年です。

初めての韓国

在日朝鮮人のみなさんはおそらく同じような経験があるかもしれないが、当時の私はなるべく問題を避けて生活していました。歩道の向こうから東洋人が歩いてくると、さつと反対側に向かうという按配です。自分のアイデンティティの問題につき返されるのが不安でたまらなかつたのです。当時、私は学校の授業で、美術史の時間が最も楽しかったです。とくに日本の絵画に惹かれていたため、よく日本文化会館に通っていました。当時、母はこの文化会館の会員だったため、自分の娘がこの会館に通っていることを、ある日、なじみの日本人職員に話したそうでした。しかし、ナタリー・ルモンヌがこの私だとわかったと、その職員はいがかりに母に聞いたのです。「いったいどうしてニク臭い韓国人などをもらおうと思つたの？」と。学校を卒業してからしばらく「焼肉HBOO」という店で働きました。東洋人の顔で働いていること、そしてフランス語が話せるといふ理由で、ふたつ返事で雇っていただきました。じつをいうと、店長は在日朝鮮人だったのです。当時、よく店長に「バカネ、バカネ、ミリーチン、バカネ」と、馬鹿にさらば朝鮮語ができて然る。俺たちは日本人に嫌われているかもしれないが、俺はおまえと違って、朝鮮文化を忘れない。こう彼は誇らしげによく豪語していました。でも彼には、私たちが養子として朝鮮文化が自明のものではないことな

この年は、ベルギーでもちよつとした韓国ブームになりました。街に貼り出されたオリピック観戦ツアーのチラシをみて、私も興味をそそけましたが、私費で行くのは怖しすぎる。どうせなら安く招待されれば観戦したいものだと思いましたが、そんなある日、アルバイト先のプリュセル映画祭の本部

役所、警察を尋ね、しまいにはテレビに出演しました。すると「あの子はたぶん親友の娘だ、本人に報せるから、数日待つように」との連絡がテレビ局に入りました。母の親友が偶然にも番組を見ていたのです。母が姿を現したのは、それから三日後のことでした。テレビに出演したのは、私の場合、市役所や警察に残されていたわずかな情報を除けば、この「顔」が唯一の身分証明だったからです。

私の養子ファイルには、「駐留アメリカ軍の兵隊の娘」と記載されています。子どもの頃の私は、肌の色が少し濃く、髪はいまより縮れ毛で、眼の色もやや薄かったからです。ですから、私は長い間、自分を売春婦の娘だと思ってきました。そのことで悩んだこともありましたが、もちろん、私は売春婦を見下す人間ではありません。しかし、いざ厚化粧の女性が現れたらどのように思えたらうか？ 素直に喜ぶのだろうか？ 正直のところ、不安でした。ですが当日、姿を現したのは化粧のない、真面目で、背の高い女性でした。韓国人の平均身長からすれば、私めだといふ背の高いほうなので、すぐに気がつきました。当時は韓国語が話せなかったため、ままたらない英語でのやりとりとなりました。まず「父はアメリカ人？」と尋ねたところ、きっぱり否定されました。「じゃあ、韓国人？」と尋ねたところ、人種について質問してみましたが、いずれも答えは「ノー」でした。しかし「日本人」と尋ねたとき、彼女は答えを

うとませんでした。だから、父はおそらく日本人じゃないかと思っています。母は日本語を解さないで、おそらく韓国語が話せる日本人だと思います。どうも西日本に住んでいるらしい。私を養子にしたのは、おそらく私が日本人との「あの子」だったということ、また娘ばかりの家族構成からみて、男の子を求めていたからなのでしょう。

二回目の韓国訪問を終え、ベルギーに戻った私は、またまた「地上に舞い降りたイエス」のようでした。実の母との再会の噂は、伝言ゲームのように広まり、さまざまな相談が寄せられてきたのです。そこで、これからは各自が自分の親を捜せるように、一九九一年のおりに「ユーロ・コリアン・リーグ(EK)」を立ち上げました。これはヨーロッパに離散する、成人した韓国養子たちのためのアソシエーションです。わたしは韓国政府からも養父母たちからも、いっさい援助をうけない、完全に独立な組織をめざしました。ただ問題は、ユーロ・コリアン・リーグとはいふものの、だれひとりとして韓国語をともに話せず、韓国文化にも精通していないこと。したがって、まず韓国についての資料を集めることから開始しなくてはなりません。また比較的短期間のうちに、二度にわたる民族音楽のコンサートで、ベルギーの韓国人協会の協力を得て開催しました。しかし韓国人からは「あなたたちの活動は、所詮、韓国文化の猿真似にすぎない」と揶揄されたこともありまし

を誇示するものばかりをみせようとした。他方、孤児院の見学の希望や庶民たちとの接触はいっさい実現しませんでした。さらに、ツアリのあいだ中、この無償旅行を提供している韓国政府がいかに偉大であるかを言われ続けたからです。

養子の権利を求める運動へ

ベルギーに戻ると、さっそく韓国訪問の感想をいろいろな人に尋ねられました。またしばらくして、韓国語の講習が開講されていたブリュッセルの韓国教会に通うようになり、そこで初めてベルギー在住の、成人した他の韓国養子たちに出会いました。彼らが教会に集まっていたのは、語学講座のためだけでなく、ここに来れば「本物の」韓国人と交流がもてるからです。みな何となく、出身国の文化との接点をもっているのです。彼らと同じベルギー育ちの養子でありながら、韓国を訪ねてきた私は、「地上に舞い降りたイエス」のように迎え入れられました。これまで彼らの間で、だれも韓国を訪れたものがないかったからです。オリンピックのおかげで多少情報は入ってきたものの、ま韓国は「想像の国」でしかなく、自分たちみんな、出自や文化的アイデンティティの問題で苦悩していることをあらためて痛感しました。そこで何かをはじめたいと思ったので

養子の権利を求める運動へ

すが、同じベルギーでも、フランス語圏とフランダース語圏出身者に分断されていた。出身国の言葉や文化をほうに、韓国文化センターのようなものは存在していませんでした。さらに私たち一人一人の体験も違う。第一世代の私たちと、最近の若い若い韓国養子との間では、大きな感覚のズレがありました。九一年になり、ふたたび韓国を訪れる機会がやってきました。韓国には「海外韓人スポーツ大会」というものがありまして、そこにあらたに「養子枠」が設定されたのです。私に声がかかったのは、例の映画が成功したおかげで、名前を大使館に憶えられていたからです。当時、柔道をしていたので体力には自信があり、一〇〇メートル走に出場が決まりました。さらに今回の訪問に際して、政府は実現協力の協力を約束してくれました。しかし政府の調査はは々と打ち切られてしまったため、結局は、大会に参加したもう一人の養子と自分たちの力で探すことになりました。いろいろ調べた結果、何と二人は同じ孤児院出身であること、また同じ飛行機に乗せられヨーロッパに送られたことがわかりました。たった一週間しか時間がありませんでしたが、五日目にして母にめぐり合うことができました。

養子の権利を求める運動へ

どのように探したかと言えば、自分が預けられた孤児院や市



“ミ・ウォ”シリーズ #1
ライス・ペーパー、ソウル、1995年
作品中の「美」という漢字は朝鮮語で「ミ」
と発音する。しかしその下に書かれた「ハングル」
[ウォ・ヨ]によって、意上では「ミ・ウォ・ヨ」
となり「醜い」という意味になる。「美」は
「醜」に読みかえられることで滑稽にされている。

路を持っていないことでした。そこで思っていたのが、アートという手段です。私は昔から美術が好きで、家を出た三歳のころからはひとりて絵を描いていました。でもまさか自分の創作活動と運動が結びつくというとは思っていませんでした。しかしここに来て、言っただけではなく、創作活動を通じて権利要求を表現していこうと思うようになりました。アートのための優れた媒体であることがわかったのです。

養子の権利のための闘い

ここで少し私の足取りを振り返ります。九三年から九四年にかけては、韓国語を習得するとともに、韓国の国際養子斡旋機関でボランティアとして働きました。そして、九五年からは、スウェーデン出身の彼氏と韓国の大学で展示を開催し、国

際養子の問題を訴えました。これは「国際養子の停止」の政府発表がなされた九六年と重なりました。このような悪運政府が踏み切ったのは、八八年のソウル・オリンピック以来、韓国の児童売買に対する悪評がたついていたからでした。こう日た国際社会からの批判がかわつたため、政府はついに九六年に国際養子の停止を宣言したのです。しかし表面に停止されても、裏ではその後も続けられていることになりました。ともあれ、私はこの機会を捕えて、国際養子の問題性を韓国社会に訴えたいとともに、なぜ政府はお金をかけて積極的に孤児の救済にのりだすかわりに、外国に養子として放出するという安易な政策をしたのかを告発しました。この年ほど、国際養子の問題がメディアの注目を浴びた年はありませんでした。問題提起するにはまたよい機会でした。

こうして九六年に、三人の国際養子のアーティストで共同展を開催し、人々に韓国の養子政策の功罪について考えてもらおうとした。この共同展は予想外にメディアの注目を集めたので、私もそれを利用して韓国養子の権利要求を打ち出しました。とりわけ、韓国養子のための特別な在留資格をつくること、そして実親探しのための便宜をはかることです。後者に限っては、国際養子の修養機関にポスト・アドプション・ケアという部署が設け

た。悔しいけれども、これが当時の私たちの限界でした。このままではダメだろうということで、話し合いの結果、おを捻出し合い、代表のひとり韓国へ送ろうということになりました。みんなでも投票した結果、私が選ばれました。こうして九三年に三度目の訪韓を果たすことになったのです。

韓国への移住

韓国に移住するに際して、私は当初、一年もあれば、韓国社会の理解や協力をとりつけ、海外養子のためのNPOを母国に創設することができたらと、楽観的に状況を踏んでいました。よき理解者に事務所とる部屋を貸してもらい、生活費は一年分たため貯金でどうにかまかなえるだろうと思っていたのです。さらに、フランス語圏で育った私は韓国語はもうろん英語でもなかつたのですが、一年もあれば言葉の問題はとうにでもなるだろうと思っていた。しかし移住してみても、こうした甘い幻想が、ひとつひとつ打ち砕かれていったのです。でも一方で、私は天性の楽天性というか、積極性がありました。これがなければ、山積する困難の前へこたえてしまったのではないかと思います。韓国の養子制度を理解するため、私は韓国最大の国際養子斡旋機関でボランティアをしながら、韓国語習得のための語学学校にいました。語学学校では、授業が英語でおこなわれるため、英語の習得からはじめなければなり

ませんでした。韓国語クラスの人数は五人ほど。そのうちの三人が日本人学生でした。またクラスには、自分のほかにもスウェーデン出身の韓国養子が一人まじっていました。しかし彼女もかつての自分と同じように、私が韓国の養子であることがわかった、なかなか話しかけてくれようとはしませんでした。ただこの授業の最終回では、どうしても全員と話をせざるえない場面が訪れ、ようやく口を開いてくれました。じつは彼女も母親を探しに一年前から韓国に来ており、一向に手がかりがつかめずに焦っていたのです。そこで協力を申し出ました。そして一緒に探はじめたところ、わずか三日で彼女の母親を探し当てたことに成功したのです。その後、彼女と二人で国際的な養子のアソシエーションをつくることになりました。

このころから韓国にいて自分は何ができるか、私自身の問題意識が明確にはじめました。当時私は外国人学生として「観光ビザ」扱いで入国していたのですが、私たちが韓国養子は自ら望んで外国に移住したではありません。したがって、政府に対して一連の特別処置を求めいくことにしました。とりわけ、養子としての特別な在留許可ではなく、大人の養子としての承認を要求することにしました。韓国での活動の障害のひとつは、韓国籍をもたないNPOをつくる資格がない、したがって、法や制度の仕組みを改革すべく、社会に働きかける回

「Overseas Korean Artist Yearbook」海外コリアン・アーティスト年鑑「図2」は、私たちのマニフェストのひとつです。今日は皆さんの若い方が来てくださったので、最後にひとことだけお伝えしたいことがあります。とくに在日コリアンのみなさんは、日本社会でつらい思いをすることも多いでしょう。しかし、いかなる時も自分の不安を他者に投影し、軽蔑の応酬に入らないこと。そして、つねに相手人間として尊重する感情を持つてほしいと思います。

質疑への答え

このコト

●現在の養子の滞在権は？

現在では、二回間の滞在許可証を発給してもらえようになりました。ビザの発給とともに労働許可もおります。ただし、韓国の出生証明書が必要です。この一〇年間の権利要求を通じて、次第に養子を見る眼が変化してきているように思います。すなわち、当初の否定的な存在から肯定的な存在として見られるようになってきた。

私は自分自身が養子であるため、この問題に深くコミットしてきましたが、しかし養子制度一般に反対しているわけではありません。養子という措置がひとつの選択肢であることを否定す



図2 "O.K.A.Y. BOOK" Vol.1 の表紙

が当選した際には特別に滞在許可証を発行してくれるよう求めました。

九八年にはロサンジェルス「コリアン・アメリカン・ミュージアム」というところで大きな韓国展がありました。これは韓国養子について外国で開かれたはじめての大きなイベントです。私はこの機会に、三人の養子仲間とあるパフォーマンスをしました。それは以前ソウルでやったもので、アメリカのクワイ・クラックス・クラブを真似た（私たちの肌の色を表す黄色の頭巾と外套をかり、"Yellowface"）私は養子異邦人と書かれたステッカーを街に貼って歩くというものでした。アメリカでは、このステッカーを外套にはりつけ、コリアン・タウンを練り歩きました。行き交うひとびとは私たちが道化師だと思って面白がっていたようですが、これも世論を喚

るつもりはありません。ただ現在の養子制度のあり方に異議を唱えているのです。たとえば、近年の米国においては、肌の違いから引き起こされる養子の苦勞が少しくも軽減されるために、黒人の子はなるべく黒人家庭に養育されるよう、配慮されています。これに対して、韓国ではまるで構わないし児童を欧米家庭に養育させています。

●韓国からの養子は値段が安いというが、なぜ安いのですか？

国際養子の間では通常、受入れ国の養親機関と母国の養親機関との間でとりおこなわれます。この場合、養父母は自国の養子制度にお金を払いこむことになります。一人あたりいくらか支払われているのは、データを持ち合わせていません。国際養子は一般に私的養親機関が施行するため、データも公開されません。とりわけ韓国養子が安い理由は、政府がいれば国策として国際養子を奨励しているため、圧倒的に数が多いからです。遺棄された児童を長年にわたって養育するのはとても手間もお金のかかる事業です。政府は児童を養育するのは国外に放出することで、安上がりな児童福祉政策をおこなってきたのです。

もう一つ重要なのは、韓国養子の割当制度の問題です。政府は、どの国にどれだけ数の養子を養育するか、諸外国からの投資額に応じて決めてきました。ご存知のように、韓国は合衆国につく経済的に依存しています。たとえば、米国は韓国内に軍隊を駐留させる多大な出費をしている。したがって、韓国政府はこれと引き換えに、合衆国向けの養子の割当数を高く設

起する表現手段の一つです。これを韓国における「子どもの日」にあわせておとし、君が養子として外国に売られたらどうなるかと、子どもを不安にするパフォーマンスをしました。またこのころから、韓国養子たちの権利要求に対する賛同を求める署名キャンペーンを開始しました。一〇〇〇人の署名が集まれば、私たちが求める法案も通るのではないかと期待したからです。法案の審議予定日の七月一日には、「養子の私たちに、いかなる権利も認められていない」と書かれた大きな横断幕を手に、いつもの三人で国会議事堂の前でパフォーマンスをしました。

どんな国にだって問題はあります。どこかの文化が他の文化より優れているわけではありません。しかし長年養子受入れ国で育ち、その国の文化的な空気感吸ってから、母国に戻ってくる私たちに、いまの韓国社会は思わしく、愛しいと思うものが数多くあります。とりわけ、国籍法です。私たちは金銭的な要求を求めているのではありません。韓国を求めているのでもない。ただ奪われた権利の回復を求めているのです。

また、創作活動を通じて、韓国社会におけるアートの位置が西洋におけるそれとはまるで違ってくるのにも驚きました。韓国の芸術界では若いアーティストが顔角を現しにくい体質がある。まして韓国語を持っていないければ、かなり絶望的です。だからここでも、別の国語を練りひろげる必要があります。O.K.A.Y.

のさまざまな政府プログラムも存在しています。母国の言葉も学ぼうと思えば、政府の語学講座を受けることができます。夏季の韓国訪問プログラムに参加することもできる。もちろん、いまではどかならずで人国で暮らす。韓国養子であることは、昔ほど惨めなことではなくなってきたのです。私たちはこのようなあたり前の権利を求めて闘ってきたし、ひとりひとりの犠牲者をださずに済んだことに感謝しています。しかしいまの若い世代には、これらは自明すぎることはかりで、そのことが私たちに少し悔いもありました。

●ベルギーの養父母の「自分たちが引き取らなければならなかったからではない」という言葉が意外でした。頻りに言われる言葉ですか？

残念ながら、よく聞かれる言葉です。こうした言葉は、養子たちを苦しめる原因ともなってきました。人間の本性は、日常の些細な場面でも飛びだすことです。たとえば、食後のお皿洗いをはたきや、養父母の虫の居所が悪いときなどです。「あなたたちはいったい何を注ぎ込んだと思っているの？」「だれのおかげでこんな幸せがあると思っているの？」「でもなぜ私がこんなことを言っているのか？」「あなたたちは、どんなに理不尽でも、いったん放たれた本音は、重く子どもの心にのしかかり続けます。ミヒキは、韓国では「チョウ・ミヒ」としてお母さんのつけられた「キム・ビョル」、アーティスト名としての「スター・キム」などのいくつかの名前をもっているらしいです。

定することになります。これに比べ、投資額の少ないヨーロッパ諸国に対しては、養子の割当数も少ない。なかでもドイツは、ウェーゲンが突出しているのは、この国が韓国での病院の建設などに必要としているからです。このような割当制度の存在は、植民地主義の残存であるように思えます。

●韓国内部養子に取組む機関との連携はありますか？

韓国では国内養子もとても盛んです。たとえば、ベルギーでは一年に成立する養子縁組数は四〇前後であるのに対して、韓国では毎年二〇〇〇から三〇〇〇の国内養子縁組が成立している。これは国際的に見ても相当な数です。ですから、韓国の国際養子が多いのは、国内養子制度が未発達だからではありません。問題はむしろ別のところにある。すなわち、一般に児童を養子に出す条件として、実親が子に対する親権を放棄している必要がある。この点が意味で、将来実親が子を要求し、トラップになる場合には、国内養子には出しにくい。そして、児童福祉施設は引き取った子どもを「孤児」扱いにして、国際養子にだしてケースが多いのです。欧米だって、親が親権を放棄していない児童を養子にもうけることはできないわけですから、これは明らかなダブル・スタンダードです。

さらに私たちの個人情報の改竄問題があります。たとえば、ベルギーの養子制度は、トラップを防止するため、完全な孤児を欲しがります。ですから韓国側ではこのように必要に応じて、養子のファイルから血縁者の名前を消去して

ね。在日朝鮮人の場合、民族名と通称名がありますが、ミヒキはこれらの名前をどのように使っていますか？

私は六月生まれなので、「二重性」をあらわす双子座で、そのために、いくつかの名前を使い分け、複数のアイデンティティを楽しむことにしています。しかし、もともと

いま挙げた三つの名前のほかにも、「ナタリー・ル・モワンヌ」というベルギー名ももっています。しかし韓国では、ベルギー名がもっとも評判が悪い。養子問題をめぐる罪責意識を呼び起こすからです。ですから、「ナタリー・ル・モワンヌ」を敬遠し、韓国では「チョウ・ミヒ」と呼ばれることが多い。「キム・ビョル」は私のプライベート・ネーム。私をこのように呼ぶのは、祖母とその家族くらいです。

ところで、ベルギーにおいていくらか私が「ナタリー・ル・モワンヌ」と名乗っても、これも真正正路のベルギー人だとは思ってくれない。この点が、在日コリアンの通称使用と大きく違ってくる。在日コリアンの場合、日本名を名乗れば、日本人として通る場面がある。この場合、コリアンとしてのアイデンティティが犠牲にされるかわりに、通称が日本社会での隠れ資になりうる。ところが、ベルギーでは、この面にコリアンとしてのアイデンティティが刻まれているため、自分の出自を隠しようがないのです。

●「朝鮮」というときのイメージ。三八度線以南の「韓国」のイメージが初めからありましたか？

しょう。ベルギーとは反対に、オランダの法律では、身元不明の子どもを受け入れることはできない。したがって、オランダ向けの養子は出生時の名前が記録に残ることになります。このように私たちの個人情報、需要に応じて自由自在に操作されてしまったため、ルーツ探しも難しくなりました。

●ベルギーでの韓国系養子の世代間のズレとは？

いま二〇歳から二五歳になっている韓国養子と、私たちの最大の違いは、メディアの発達により、韓国がくつと身近になったことです。たとえば、いま韓国について何かを知ろうと思えば、インターネットに接続することで、たいいの情報は得られます。また韓国の話も、マス・メディアにより取り上げられることが多くなりました。ところが、私たちの頃は、ほとんど何もありませんでした。なまに韓国についての記事が新聞や雑誌などにわたしても、養親たちが読もうと思えば隠せてしまったのです。インターネットの発達以降、いまはこのような情報のコントロールは不可能になった。いまの若い世代も、思春期の一定年齢に達すると、アイデンティティ・クライシスに陥ります。しかしいまは必要に応じて母国の情報をうるべきようになったのです。ただ望郷の念を抱いて育ってきた私たちは、この点が違います。母国とは限りなく想像の場所であつた私たちにに対して、いまの若い世代は韓国と触れ合う機会も格段に増え、韓国行きの航空券も安く入手できるようになった。さらに、いまでは韓国養子向け

文化・芸術・思想——領域を横断する批評

al-ashiya / VISPERAS / 전야 / I

季刊

前夜

第1期

創刊号

2004年秋

文化と抵抗

高橋哲哉 ロングインタビュー / 小説 目取真俊

ノーマ・フィールド / ガッサン・カナファニー / ジャック・デリダ



高和政
ピーター・バラカン
リー・ハーシュ
鄭栄相
清木愛砂
ミヒナタリー・ルモワンヌ
アリエル・ドルフマン
飯島みどり
田中優子
津京植
新城郁夫
中野敏男
宋達玉
駒込武
君塚仁彦
松本昌次
中野英世
源永陽子
実村文
中西新太郎
三宅晶子
池田逸子
李孝徳
岡直理

●「親と子の相互関係」について少しお聞かせください。

「親と子の相互関係」について少しお聞かせください。

「親と子の相互関係」について少しお聞かせください。

●「親の位置」について考えさせられました。ミさんのベルギーの両親はひとりオリエントだったと伺いました。ミさんの創作活動を通じて、それが徹底的に否定されたといったときに、彼らは誰をどのように変えていったのでしょうか。「親と子の相互関係」について少しお聞かせください。